

日 時：2015年4月17日 19:00~20:30

場 所：内野設計

●徳島県木の家づくり協会 住まいの相談広場チラシ

●あわホームホスピス研究会連続講座チラシ

●J I A 四国支部大会チラシ

→トークセッション「あの日からの建築」への意見交換メモ

- ・ 仮設住宅や先行高地移転試行などの実取り組みとは別の、認識やイメージを語る。
- ・ 建物は無機物だが、なくなると悲しい。気持ちが宿って、単なる無機物ではなくなる。
- ・ 人を失うのと同様に「命のはかなさ」を感じる。
- ・ 建物に命を吹き込む。
- ・ 木岐の先行高地移転の「まちが山を登る」は、生命感のある表現だった。
- ・ 震災を、忘れないこと。
- ・ 幼いころ住んだ家は大事。
- ・ 建物が、命あるものとして進化していく。
- ・ 未完成であることの意味。
- ・ 床の間の落とし掛けの裏は仕上げない。
- ・ 日光東照宮の門の逆柱。完成すると同時に崩壊が始まる。未完成にして厄除けとする。
- ・ 命が宿った家を大切にする。
- ・ メーカーの家は自動車のように。触るところがない。断熱、遮熱、省エネ、耐久性といった「性能」が家の価値にすり替わり、自然とのかかわりや積極的に人が家に関わる部分は排除されている。
- ・ 高齢者の方々が懸念する、「次世代への負の遺産とならないこと」、メンテナンスや保証をうたうことなどを家の価値にすり替えていく。
- ・ かたづけコンサルタント近藤麻理恵さん「物への感謝の気持」
- ・ リフォーム→新しい表現はないか？再生→蘇生？リバイブ(revive)?
- ・ 耐震改修で家が「一新されてしまう」ことへの抵抗感がある。自分が元気なうちは触ってほしくない。→本当によく聞く話。
- ・ 耐震シェルターは、他の部分はそのままに新しい要素を挿入するだけで済む。ところが受け入れられやすいのでは。建てた人の思い入れを傷つけないから。「つないで」いるから。そこを手始めに、より安全性を高めるリフォームへの突破口にもなりうる。
- ・ リフォーム、基礎まで手を入れる大規模なものから耐震建具やシェルターまで、手法も経費も多様であることが一見して理解できる絵があれば。
- ・ 「住み継ぐ」→「住み継(な)ぐ」
- ・ すまいは、世代と世代を継(な)ぎ、人と地域を継(な)ぐ。
- ・ 茅場で育った茅で葺く茅葺き屋根。一世代で一回の葺き替え。「結」、地域の人々が共同で行う。葺き替えで出る古い茅は地域の人たちの畑の肥料に。というサイクル。農作業が家づくりとリンクして、機能が家の周辺のデザインとなり、景色をつくる。→自然と人の営みがつながっていた。

- そういう大きな流れやつながりが切れて、家が単体の商品となり、コミュニケーションの形も同時に失われていった。
- 自動車のように完成した家→未完成で可変で、自然や人と関わる面や隙間がたくさんある家。太陽が入り風が抜け、人が出入りする家。
- 佐那河内の安富さんのいう「人やお金や物」といった燃料を与えて動かすのではなく、村民目線で動き始めるエンジンをつくりたい。
- 言葉、それを発する人、によって人は突き動かされる。
- 「陸前高田のみんなの家」は『切り取られた森の風景』では。すべて流された景色の中にそれを置いてある。その周りに、森が見え、人の営みが見える。再興した自然と人の営みが、集落が見えてくる。

●見えてきたこと

- キーワードは「つなぐ」では。終末とスタートを点で継ぐのではなく、重なる時期があって馴染ませながら継（な）いでいくこと。壊して建て替えるよりも気持ちの入った「すでにあるもの」を、次の世代へ、人へ、継（な）いでいきたい。
- 被災してからスタートするのではなく、事前に考えておいて被災前と被災後を「継（な）ぐ」ことで、既存の町をあらかじめ「より豊か」に、被災後の復興を人間味のある、生命感のあるものにしていくことが「事前復興」の意味ではないか。
- 「生きた心地」を押し上げておく！